感性と表現の世界

―創作オペレッタ作りを通して―

北村恵子

Ⅰ　はじめに

私達は生きるために必要な様々な表現活動をして毎日を過ごしているが、最近特に感性や表現の大切さが言われるようになってきた。

教育面では、人間として充実して生きていくための知的教育と、個性を重視した感性や表現の教育がバランスよく行われる必要がある。しかし、我が国の現況をみると、前者に重きが置かれ過ぎているように感じられる。

私はそのバランスをとる方法として、創造的音楽学習（Creative Music Making 略してCMM）やドラマ教育（Creative Drama）の考え方をもとに、授業で創作オペレッタを作る活動をしてきた。[1]

CMMやドラマ教育に共通する目的は「一人ひとりの個性的な表現を大切にし、生きていくために必要

な感性や創造力、表現力を育てる」ことにあり、創作オペレッタ作りの最も基本的視点にしているものである。[2]

ここでは、人間にとって感性や表現の教育がなぜ必要か、また、その筋道はどうなっているのか、CMMやドラマ教育とは何かについて触れ、さらに、それらの考え方をもとにして作り上げた創作オペレッタの中から、在宅介護をテーマにした作品をとり上げ、表現することの意義やテーマ内容について分析を加えてみたい。

II　感性と表現について

人間は生きるための生理的・本能的な行動や、刺激に対しての自分の思いや考えを、自分なりの表現を通して他人に伝え共感を得たり、表現することによって自分を発見したり確認したりして心を安定させている。

表現の方法には、動作や表情などの他に言葉や詩、音楽、絵画、造形、踊り、演劇などいろいろあるが、自分の思いを他人に伝えて共感を分かち合いたいという本能と、思いをはっきりさせることで自分自身を分かりたいという本能の両方の意味で、人間には表現活動はなくてはならないもののようである。また、本当のことを知りたいという、本能に根ざした欲求も持っている。その知識欲を満たすために行動を起こし自分を表現し、それによって新しい知識を獲得していく。獲得された知識は次の自己表現のために役立

ち、さらにもっと知りたいという欲求へと活かされていく。そこで、学校教育その他で、知的関心を満たすための様々な教育が行われるという訳である。しかし、人間が人間らしく自然にバランスよく生きるためには、知的教育のみではなく感性や表現の教育も必要であることは言うまでもない。過去の知的教育偏重の弊害が随所で垣間見られるようになってきたため、現在の教育界でも感性・表現教育に改めて目を向けるようになってきている。

人間には、何かに向かい合いのめり込んで熱中し、それに対して悩み惑うというような経験をしながら自分のイメージを作り上げ、自分を出し切ることにより感動や感情などの心動くものが生まれ、それを表現せずにはいられないといった過程を通過することによって、新たな自分との出会いをするという体験が必要だと思われる。そのためには、まず感じること、即ち感性を持つことが大切である。感性は誰かが教えて分からせるというものではなく、育むことによって生まれてくるものであるため、その環境作りが重要であることをまず認識したい。

さて次に、イメージと創造性について触れてみたい。「イメージ（image）とは何か」を定義することは大変難しいこととされているが、簡単に言えば心に描く想像（心像）のことである。あるものをイメージするということは、実際に見たり聞いたりしたことのないものでも、多分こういうものだろうと頭の中で思いめぐらすことである。水島恵一がイメージについて「それは何らかの知覚像的なものを意味し、対象が現存しなくても感じとられる（経験される）一種の認知事象である」[3]と述べているように、それは実際に目の前にあるものを認識するということではなく、対象が現存しなくても、自分がそれまでに受けてき

たいろいろな刺激や経験をもとに、頭の中で自由に思い描いて考え出すことである。従って、そこでイメージされた事や物は実際の姿や形とは違うし、現実には有り得ない事や物だったりもするだろう。また、人間は現実として認識したものを、さらに心の中でイメージとして膨らませることも出来る。

このように、イメージすることは頭の中で新たに創造することであるから、創造活動の始まりと言うことが出来る。一般に〝イメージは創造の母〟と言われているが、想像力は創造活動の源であり、想像力を豊かにするためには豊かな感性が必要である。従って、創造性を豊かにするための源泉は豊かな感性を育むことにあるという訳である。創作オペレッタを作るために必要な能力のキーワードは感性・イメージ・想像・創造・表現などであるが、逆に、創作オペレッタ作りを通してそれらの能力が育成されるとも言えるだろう。

Ⅲ　創作オペレッタの総合性

知的教育と感性や表現の教育のバランスをとる具体的な方法として、創作オペレッタを自分の授業にとり入れてから既に20年以上が経過した。その間、創作活動に係わった人達の大いなる変容がその活動の有効性を実証し、そして、それがさらなる継続への支えになっている。(4)

創作オペレッタは音楽を伴う劇形態をとる音楽表現活動であり、音楽、文学、美術、舞踊、演劇などの要素が複雑に機能し合う総合活動として位置づけられる。音楽教育について考えてみれば、音や音楽のみ

をとり出して教育する方法と、音や音楽と他のメディアとを結びつけた総合的な教育方法とがあるが、創作オペレッタは後者に当たり、いろいろな分野が相互に影響し合うことによって、よりインパクトのある表現が可能になるものである。現代はいろいろな芸術分野がそれぞれ独立した発展をとげ、芸術性の高いものを築き上げ、さらに各芸術分野が一層細分化されそれぞれの専門性を競うという時代になってきている。また、技術の進歩が各芸術をさらに進展させる可能性をも大きくしている。領域の専門性を超えた発展を望むには、他の領域との接点を拡大する必要がある。お互いに影響し合うことで、新たな思いがけない発見や発展の可能性も生じてくるだろう。原点に戻ってそれぞれの芸術を総合的に捉えてみることは、新たな質の高い総合芸術を発展させることになるのではないだろうか。(5)

創作オペレッタは、総合的な技術だけを学ぶために行われるのではなく、人間教育としての意味合いも大きい。創作の過程では、自分と本気で向かい合い、見つめ、考えることが出来た時点から変容の徴候が現われ〝やらされている〟が〝自主的にやる〟に変わる。そこに至るまでには悩み、苦しみ、葛藤するといった体験がどうしても必要であり、それをくぐり抜けてこそ新しい自分が発見出来る。また、創作オペレッタを作って演じるためにはグループ活動が必要であるが、仲間との共同作業で目標を達成出来た充実感を味わい、自主的活動の喜びを実感したり、何もないところから一つのものを作り上げた成就感や、演じた役柄の体験が他人の気持ちを思いやることに繋がったり、友人の意外な一面を発見するなど、グループ活動でなくては味わえない不思議なパワーによる自己発見の場が得られることが多い。他人を変えるには自分が変わる必要のあることや、本気で係わると周りの人や物に対する見方が変わり、そうすると逆に

周りからの評価や反応も変わってくることが分かる。[6]

さてここで、創作オペレッタ実践に当たっての考え方のもとになった、ＣＭＭ及びドラマ教育について簡単に説明を加えたい。

★ＣＭＭ（Creative Music Making・創造的音楽学習）

ＣＭＭとはクリエイティブ・ミュージック・メイキングのことで、創造的音楽学習と訳されて我が国に紹介された音楽教育の指導法のことを指している。一九六〇年代から一九七〇年代にかけてのイギリスでは、国語、演劇、ダンス、美術などを先導とした創造性を育てる教育が行われていたが、音楽教育にもその考え方が浸透し、ＣＭＭが盛んに行われるようになってきた。同時にアメリカ、カナダ、オーストラリアなどの英語圏でもこういった考え方の教育が行われるようになり、それが徐々に世界中に広がっていった。[7]

ＣＭＭの考え方は、一人ひとりの個性的な表現を大切にし、従来から行われてきた技術偏重の音楽教育を見直し、音への探求と自由な表現を通して、生きていくために必要な感性や創造力、表現力を深める教育にしていこうとするものである。ジョン・ペインターらは、後述するクリエイティブ・ドラマの考え方と方法を音楽教育にとり入れようと努力してきた結果「サウンド・アンド・サイレンス」のような本を書き上げたと、その著書の中に書いているように、ＣＭＭは先導する他の多くの創造的教育からの影響を受けて盛んになっていったようだ。[8]

★ドラマ教育（Creative Drama）

ドラマ教育とはクリエイティブ・ドラマのことで、演劇教育で使われる言葉である。演劇教育は現在、ドラマ教育とシアター教育の二つの方向に分けて考えられている。

ドラマ教育とは簡単に言えば、広い意味での劇的な自己表現活動のことを指し、上演することを目的にしないで個々の活動に焦点を置き、その内面的なプロセスを重視している。一方、シアター教育は上演することを最終目的とし、芸術活動として高いものを目指している。今まで曖昧だった演劇教育の概念を、人間教育と芸術教育の二つの方向に分け、それぞれの教育的価値を明確にしたものと言えよう。また、両者共演じること即ち「真似」の場の状況を自分なりに生きるという活動であるから、それは全く安全な世界の中で他者の気持ちを体験することである。(9)

これの発祥は定かではないが、教育に定着したのは一九六〇年代のイギリスであると言われており、〝自発性に基づく即興を原理としたごく自然な自己表現から始めよう〟と提唱したピーター・スレイド著『子供のドラマ』がそのきっかけであるという。(10)

以上からも分かるように、ＣＭＭとドラマ教育は、従来から行われてきた技術偏重教育を見直し、一人ひとりの個性的な表現を大切にするという共通点があった。そして、ジョン・ペインターらが音楽教育にとり入れようとしたのが「自発性にもとづく即興を原理とした自然な自己表現」を提唱したピーター・スレイドのドラマ教育の考え方であったという流れがある。この点について、音楽教育の関係者にはあまり知られていないようだ。何故ならば、ジョン・ペインターらの「Sound and Silence」の邦訳に当たり、山

本文茂らは文中のCreative Dramaを創造的演劇と直訳するミスをおかしている。[11] Creative Dramaは外国ではクリエイティブ・ドラマまたは単にドラマと言われ、我が国では一般的にドラマ教育と言われている。創造的演劇という言葉は、我が国においてはドラマ教育とは異なるニュアンスで理解されてしまう。この点からも、邦訳の時点で山本はドラマ教育についての認識が薄く、ジョン・ペインターらがドラマ教育に学んだという道筋を理解していなかったことが分かる。そう考えると、我が国の音楽教育界では創造的音楽学習の先駆的指導者とも言われる山本らの邦訳した「音楽の語るもの―原点からの創造的音楽学習」[12]も、ドラマ教育の視点から改めて分析してみる必要があるだろう。

何れにしても、CMMやドラマ教育といった方法は、教育関係者に余すことなく知られているというものではないが、少なくとも、我が国における技術偏重教育からの脱皮の方法として大いに関心が寄せられている。しかし、未だ研究途上にあるものだけに、前述の様な混乱はある程度予想出来る。しかし、それらの混乱の出現も、さらに新しい考え方や方法を産み出す母体になることも考えられる。願わくば、音楽教育や演劇教育の関係者だけでなく、国語や美術といった多方面の教育者達とも共同研究の出来る体制の早期出現を期待したいものである。

Ⅳ　在宅介護をテーマにした創作オペレッタ

さて、創作オペレッタ作りは、私の係わっている幼児教育科、保健婦学科、看護学校などの音楽授業で

実践に移し、現在までに多くの作品が創出された。

創作作品には楽しいもの、夢のあるもの、ファンタジックなものなどをテーマにしたものもあるが、差別、いじめ、登校拒否、在宅介護、看護婦不足、エイズ予防、育児不安、その他社会問題化しているテーマを描いたものも多い。ここでは、在宅介護をテーマにした作品の一つをとり上げ、その内容について分析してみたい。何れも、学生達がストーリー・作詞・作曲などを全部創作し、かつ演じたものである（具体的創作方法は省略）。

【在宅への道…痴呆老人を通して家族愛を見た…】

これは一九九三年に保健婦学科の学生が創作した作品で、一般教育「音楽」の授業の中で、皆の持つ音楽や音楽以外の様々な能力を結集して作り上げたものである。痴呆老人の在宅介護の問題は、どこの家庭で起こってもおかしくないことであり、皆で考えるきっかけになるようにと作られた。

あらすじ

★おばあちゃんは独り暮らし。いつもの様に保健婦が訪問すると、娘と間違われてしまう。痴呆の始まりではないかと察知した保健婦が家族に知らせる。

★長男、長女、次男、次女のそれぞれの夫婦と独身の三女が長男の家に集まり、家族会議が始まった。この状態の母を独りにしておく訳にはいかないが、誰の家で看るのかが決まらない。さりとて、老人ホー

ムや病院へというのも、お金がかかったり近所の人の噂が心配で駄目ということになった。

★とりあえず長男の家で看ることになったが、さっき食事をしたことを忘れて食事を食べさせて貰わないとか、血圧の薬やお金を嫁がとったと言い張ったり、夜中に徘徊するようになった母に堪り兼ねた長男が、再度家族会議を召集する。

★「家で看ようとしたのが間違いだったんだ」「それならお前が看ればいいじゃないか」というような話の繰り返しで皆で悩んでいたが、母が孫を長男と間違えて世話を焼く姿を見て、「昔はあんなに大好きだった母さんなのに、自分達のことしか考えていなかった」ことに気づいた家族は、手を繋ぎ保健婦さんの助けを借りて頑張ろうという気持ちに変わるのだった。

この作品は、自分の家に痴呆老人を抱えていた学生の提案で創作に至ったものであり、現実味に満ちている。高齢社会に突入する我が国の社会問題として、決してひと事ではないことを感じさせるのに十分効果的な作品となっている。

創作オペレッタという形式は「人を引きつけるものだと実感した。音楽だけの世界でも芝居だけの世界でもなく、かと言ってクラシックオペラの様に堅苦しくもなく、内容も興味のあるもので画面から目が離せなかった。」「音楽が入ることで内容がさらに盛り上がり、見る人々の心を掴むという感じだ。」と、この作品ビデオを見た多くの人達が創作オペレッタ形式の素晴らしさを述べている。

V　おわりに

一九九五年度県民カルチャー「開放講座」の二コマを担当するに当たり、専門とする創作オペレッタを福祉の領域から考えてみることにしたが、とり上げる題材によっては、ホットな社会問題になっているものが多いことに気づいた。Ⅲ及びⅣで述べた様に、作品を創作した学生達もそれを観劇した者も、音や音楽やその他の分野との融合による創作オペレッタの形式は、あるテーマをより分かり易く相手に伝えるために有効な方法であると考えていることが分かった。また、Ⅲで述べたように、総合性を持つ創作オペレッタは、物事を的確に感じとる感性及び表現技術の向上を期待出来るのみならず、人間教育としての意味合いを持つ活動であることも分かった。ここでとり上げた在宅介護をテーマとした創作オペレッタの例が語るまでもなく、私達の身近に差別、いじめ、登校拒否、エイズや心の病、福祉に関する諸問題など、教育、社会、医療、福祉などのそれぞれの問題が山積みされており、それらに無関心ではいられない現実がある。

創作オペレッタは、社会問題になっていることだけをテーマにする訳でもないが、少なくともⅣの例では、少々堅く重苦しいテーマであっても、音や音楽の伴う劇という形で、ソフトに確実に相手の心に伝わっていったことが分かる。創作オペレッタを作り演じることは、ドラマの中という虚構の世界を生きることによって、人間とは何か、物とは何か、社会とは何か、世界とは何かなどについて総合的に学ぶことが

出来、さらに、個々の感性や自由な発想を認め大切にすることによって、伸び伸びと自分を表現することが出来る。勿論、音楽に対しても様々な感性や技術の伸張が望める。この様に、創作オペレッタ作りは人間が生きるために必要な要素の様々な前向きの可能性を秘めた活動であることを確信しているが、今後もこの活動を継続しつつ、新たなる可能性と創作方法の改善に努力したいと考えている。

【注】

(1) 創作オペレッタ作りについては、拙稿：総合音楽教育としての創作オペレッタ（一九八四）音楽教育学一四号　日本音楽教育学会の他、上田女子短期大学紀要七号（一九八四）、九号（一九八六）、十号（一九八七）、十四号（一九九一）、十五号（一九九二）、十六号（一九九三）、十七号（一九九四）、十八号（一九九五）、十九号（一九九六）のそれぞれに、関係個所の詳細を述べてあるので参照されたい。

(2) 拙稿：ドラマ教育と創造的音楽学習（一九九三）　上田女子短期大学紀要一六号

(3) 水島恵一：イメージの基礎心理学（一九八三）　誠信書房

(4) 前掲書(1)を参照

(5) 拙稿：タスマニア州における音楽教育（一九九〇）　東京学芸大学第四部『総合芸術教育の研究とその生涯教育への応用』報告II

(6) 拙稿：創作オペレッタ・育児シンフォニーかがやけ子育ての一考察（一九九四）上田女子短期大学紀要一七号及び、エイズ予防をテーマとした創作オペレッタ公演の一考察（一九九五）上田女子短期大

学紀要一八号で、生涯学習として創作に参加した一般人への調査結果も、学生達と同様の反応であることが分かった。

(7) 前掲書(2)を参照

(8) John Paynter and Peter Aston: Sound and Silence, Classroom projects in creative music, (1970) Cambrige Univ.

(9) 小林志郎：ドラマ教育の領域とその可能性（一九八八）　東京学芸大学第四部『総合芸術教育の研究とその生涯教育への応用』報告Ⅰ

(10) 清水豊子：イギリスの演劇教育通信①～⑦（一九八九）『演劇と教育』　晩成書房

(11) 前掲書(2)を参照

(12) ジョン・ペインター、ピーター・アストン（山本文茂、坪能由紀子、橋都みどり訳）：音楽の語るもの―原点からの創造的音楽学習（一九八二）　音楽之友社

【参考文献】

マリー・シェイファー（高橋悠治訳）：教室の犀（一九八〇）　全音楽譜出版社

西澤昭男：音楽教育の原理と実際（一九八九）　音楽之友社

北村恵子：音楽表現の世界（一九九三）　樹芸書房

John Paynter: Hear and now, An introduction to modern music in schools. (1972) Universal Edition,

London.